

「教育臨床総合研究 特別号」

プロフィールシートの機能と役割

A Study on Roles and Functions of Profile Seat

富 安 慎 吾*

Shingo TOMIYASU

要 旨

本稿では、島根大学教育学部において平成18年度から実施しているプロフィールシートについて、その機能と役割を5つの対話という視点から考察した。島根大学教育学部において、プロフィールシートは対話のメディアとして機能しており、学年が進むにつれて、ふりかえりに用いられる言葉の多様化や深化など、学習者の成長を反映した対話を媒介していることが明らかになった。

〔キーワード〕 プロフィールシート, 対話, カリキュラム

I プロフィールシートの概要

島根大学教育学部では、教師に必要な能力の総体を「教師力」と位置づけ、その学びを評価するためにプロフィールシートを活用してきた。平成18年度から実施し、平成25年度現在まで、8年が経過している。

プロフィールシートにおける「教師力」は、右の3分野10の軸から構成されている。作成過程では、この教師力3分野10の軸に基づいた自己評価・他者評価を行う。その際、活用するのがプロフィールシートワークブック(図1)である。

ワークブックには、各領域・専攻・コースごとに、教師力3分野10の軸に基づいた達成目標を示している(例:「教育課程の変遷に関する理論・知識を理解し、課題を発見することができる。」)。表の右側では、その目標の達成を目指すにあたり、特にどの科目で重点をおいて学ぶのかがわかるようになっている。学習者は、それぞれの達成目標を読み、今の自分の達成の度合いを5段階で自己評価する。その際、このワークブックによってどの授業でどのようなことを学んだかをふりかえることができる。

教師力3分野10の軸

教育実践力	学校理解
	学習者理解
	教科基礎知識・技能
	授業実践
対人関係力	リーダーシップ・協力
	社会参加
	コミュニケーション
自己深化力	探求力
	教師像・倫理
	リテラシー

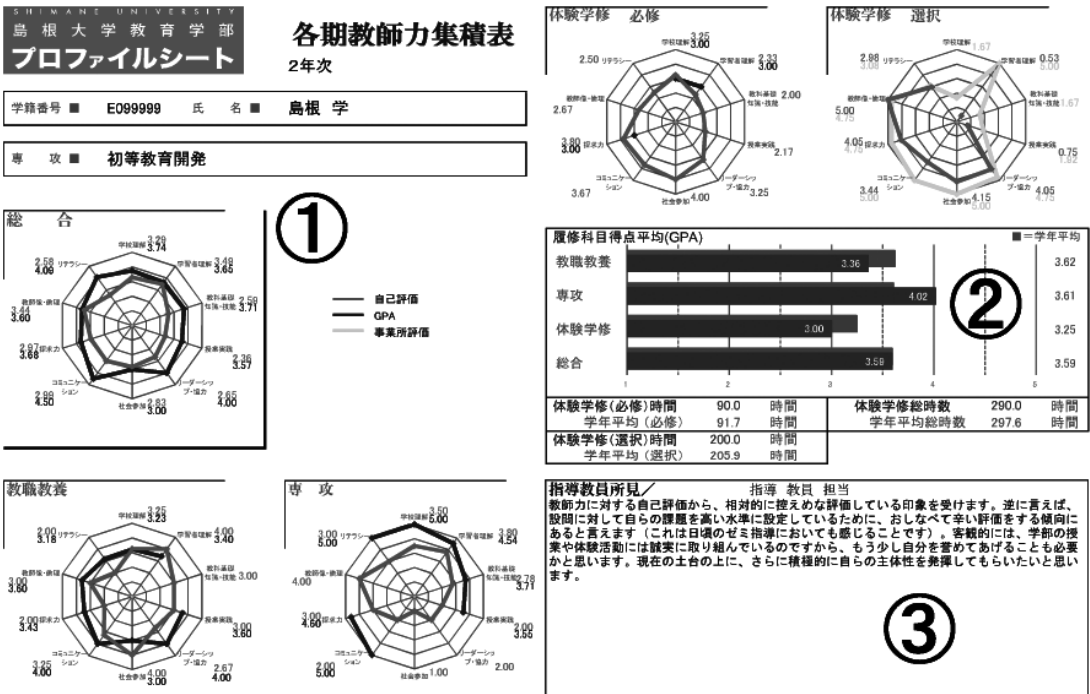
*島根大学教育学部初等教育開発講座(附属FD戦略センター兼任)

図1 プロファイルシートワークブック

階層1	階層2	階層3	達成目標	評価項目													
				学校教育実践学原論	初等教育実践基礎Ⅰ	初等教育実践基礎Ⅱ	初等教育実践基礎Ⅲ	初等教育実践基礎Ⅳ	初等教育実践基礎Ⅴ	初等教育実践基礎Ⅵ	初等社会科内容構成研究	初等国語科内容構成研究	専攻科内容構成研究	教育心理探求セミナー	卒業研究	2年次自己評価(五段階)	4年次自己評価(五段階)
教育系	学校理解	学習指導要領	小学校各教科等の学習指導要領の概要を理解している。														
		教育課程	教育課程の編成に関する理論・知識を理解し、課題を発見することができる。														
	学習者理解	学校教育の思想・制度・歴史	学校教育の思想・制度・歴史を理解している。														
		児童の発達	児童の発達について理解している。														
	教科横断的な知識と指導法	学習集団	学習集団の形態や組織化に関して理解している。														
		学習者の社会的背景	学習者を取り巻く社会的背景について理解している。														
		教科横断的な知識と指導法	教科を横断的にとらえた基礎的な知識と指導法について理解している。														
		国語科の知識と指導法	小学校国語科に関する基礎的な知識と指導法について理解している。														
社会科の知識と指導法		小学校社会科に関する基礎的な知識と指導法について理解している。															
算数科の知識と指導法	算数科の知識と指導法	小学校算数科に関する基礎的な知識と指導法について理解している。															
	理科の知識と指導法	小学校理科に関する基礎的な知識と指導法について理解している。															

学習者は数値による自己評価とともに、各領域の成果や課題について文章にして入力を行う。この結果を出力したものが、教師力集積表(図2)である。集積表には、①レーダーチャート、②GPAデータ、③指導教員所見が記載されている。レーダーチャートには、学習者の自己評価を反映したグラフと学習者のGPAから算出したグラフが重ねて表示されている。

図2 教師力集積表



指導教員は、レーダーチャートや学習者の記した成果・課題をもとに一人ひとりに所見を書き、集積表をもとに面談を実施する。学習者がこの面談の結果をもとに今後の課題・目標を記述するまでが、プロファイルシート作成の一連の流れである。

4年間の大学生活の中で、学習者は大きく3回に分けてプロファイルシートを作成する。そのタイミングは、以下の通りである。

- ①「2年生／後期開始時」
- ②「3年生／教育実習Ⅳ・Ⅴ終了後」
- ③「4年生／教職実践演習開始前」

1度目の「2年生／後期開始時」は、各専攻に分かれて1年が経過し、成果や課題が見え始めたタイミングである。1000時間体験学修やアルバイト、部活やサークル等の活動においても徐々に中心的な役割を果たす学習者が増える時期でもあり、体調管理や時間の使い方に課題を抱え始める学習者も少なくない。このタイミングにおいて自己の成果を省察し、指導教員との面談を行う。

2度目の「3年生／教育実習Ⅳ・Ⅴ終了後」は、学校教育実習を終えて、今後の進路を決定するタイミングである。教育実習での成果と課題を省察するとともに、今後の進路や卒業研究等について指導教員との面談を行うことになる。

3度目の「4年生／教職実践演習開始前」は、教員採用試験等を終えて、残りの半年間をどのように過ごすかを考えるタイミングである。教職実践演習と連動して行うことによって、プロファイルシートの作成によって見えてきた課題を、教職実践演習の中で集中的に取り組むという連携を取ることができる。

Ⅱ 対話のメディアとしてのプロファイルシート

それでは、プロファイルシートは、島根大学教育学部においてどのように機能しているのだろうか。

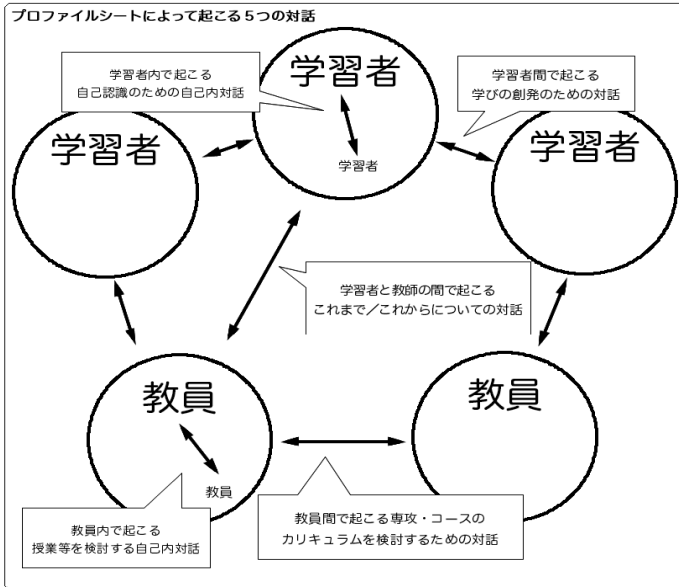
プロファイルシートは、一見すると学習者の学びを枠づけるものであるように見える。それは、「教師力3分野10の軸」を設定し、また、その下位に100以上の達成目標を位置づけていることによる。

油布佐和子 [2011] は、この点を取りあげ、「教師に必要と予想される能力・技術をあらかじめ提示し、教師の仕事を意識させ、それを卒業までに順次獲得するように仕向けることが意図されている」と指摘した上で、「ここで進められようとしているのは、あるべき教師の形、あるべき成長の形を整序し、教師が何をすべきか、どのように成長すべきかという、仕事の範囲や成長の道筋をコントロールするような意図の徹底である」と述べ、このような形での制度化が技術主義へとつながっていくことを批判している (55～56頁)

油布の指摘する通り、教師力3分野10の軸を「仕事の範囲や成長の道筋」として絶対視した場合、教員を目指す学習者の学びは外的に存在する知識の修得過程ということになりかねない。しかし、実際にはプロファイルシートはそのように機能しているわけではないと考えられる。

ここではこの点を、プロフィールシートが「対話のメディア」としてどのように機能しているかをみることによって検討してみたい。対話のメディアとしてのプロフィールシートが媒介すると考えられるのは、図3にみる5種類の対話である。

図3 プロフィールシートによって起こる5種類の対話



以下では、この5種類の対話についてそれぞれ概観していく。

1. 学習者の自己内対話

プロフィールシートが特に媒介するのは、学習者の自己内対話である。プロフィールシートの実施過程は、「達成目標に応じた数値による自己評価」→「自由記述による成果・課題の自己評価」を行ったのちに、教員との面談を経て、さらに自由記述による今後の課題・目標の設定へと推移する。数値入力によって表れてくる自己評価のレーダーチャートを見ながら成果・

課題について記述することによって、自信を持っている部分や苦手になっている部分を改めてみだし、自己評価を行うことができるようになっている。

このとき、学習者は毎回同じようにプロフィールシートに取り組むわけではない。プロフィールシートを実施する前には、必ず実施についての説明会を行い、それぞれのタイミングにおいてプロフィールシートによる自己評価がどのような意味を持つのかを意義づけている。

平成23年から平成25年の説明会では、それまで行っていたビデオ中心の説明は実施せず、2年生は「地図としてのプロフィールシート」、3年生は「対話のためのプロフィールシート」、4年生は「未来のためのプロフィールシート」と題して、追加の資料を用いた説明を実施した。

それでは、学習者はどのように自己との対話を行っているのだろうか。ここでは、平成23年度の2年生と平成24年度の3年生を比較し、その内実についてみてみたい。

それぞれの学年について、「主専攻領域」の「今期までにあなたがよく学べたことをまとめましょう」に対する自由記述の回答を検討した。

	平成23年度2年生	平成24年度3年生
対象人数	176名	176名
平均文字数	80.09	136.31

それぞれの学年の回答内容について、IBM SPSS Text Analytics for Surveys を用いて、テキスト分析を行った。抽出したキーワードについて頻度が6以上のものをカテゴライズし、それぞれのキーワードカテゴリ間の関係を可視化したものが図4・図5である。

このような発言・行動をしたのか、一つの事象に対しての背景やそれらに込められたメッセージについての考察を深めることについて学ぶことができました」「数学の授業をするということは数学の内容をただ生徒に伝えるだけでないということにも気づくことができた」など、具体的な記述が増え、教育実習や体験学修での経験と結びつけてふりかえることができるようになっていく。

これらの変化は、2年生から3年生への成長をあらわすとともに、プロフィールシートの達成目標の範囲をこえて、成長に合わせた多様なふりかえりが行われていることを示している。プロフィールシートの達成目標は抽象度を高く設定しているため、学習者は自らの具体的な経験を想起し、それを言葉にしていると考えられる。

2. 学習者間の対話

プロフィールシートは、学習者同士の対話も媒介しうる。現在、2年生および3年生では学習者間の対話は実施していないが、4年生については、平成24年度より、教職実践演習の実施に合わせて、プロフィールシートに関連した対話のワークショップを開催している（平成24年度は教職実践演習実施前だったので試験的に行った）。

4年生の説明会においては、プロフィールシートの説明と同時に右に示す「アイデアカード」を配布し、それぞれが3枚のアイデアカードを作成するように指示を行った。アイデアカードは「何を？（対象）」と「動詞」と「何のために？（理由）」の3つの項目から構成されており、これから取り組みたいと考えることについて、自由に考えることができる（例：【情報を得るもとを】
【広げる】【いまはまだ、限られたところからしか情報を集めることができているから。色々なところから情報を集めることができるようになりたい】）。

プロフィールシートの達成目標だけにとらわれず、4年生の後期という時間に取り組む意義のあるアイデアを記述する仕掛けである。

ここで作成したアイデアカードを後日持ち寄り、ワークショップを実施した。ワークショップは大きく3つのフェイズに分かれており、1つ目のフェイズでは、4人のグループでアイデアカードを相互に説明した（拡散）。2つ目のフェイズでは、新たなグループでアイデアカードの分類を行い模造紙に整理した（整理）。3つ目のフェイズでは、再びグループを解散して新たなグループを作り、それぞれの模造紙について、連想されるアイデアや具体的な活動などを書き込んでいった（展開）。

このワークショップでは、自分だけのアイデアだけではなく、他の学習者のアイデア（課題意識や目的意識）に触れることによって、これからの自分の時間の過ごし方を創発的に作り上げること

アイデアカード

何を？

選択した動詞

何のために？

ミッション

タスク

タスク

タスク

を目的とした。ワークショップののち、前ページに示すミッションカードにこれからの自分の過ごし方を記述した。このカードはプロファイルシートの面談に際して指導教員と対話する際の材料となった。

4年生という段階において、学習者はそれぞれの学びのイメージと職業イメージとを持っており、時にはそれは狭いイメージで固定されたものになっている。それらを問い返していくために、プロファイルシートを作成する中で言葉にしたイメージを相互に交流し、協同してミッションのイメージを拡充し、それぞれのミッションの語り直しを行っていく。ここでは、プロファイルシートは対話のためのきっかけに過ぎず、学びを枠づけるものではない。

今後の課題としては、2年生・3年生において、どのように対話を促進していくかがあげられる。

3. 学習者と教員の対話

プロファイルシートの作成では、指導教員との面談が行われる。この面談は、現在の悩みや考えていること、抱えている違和感などが話される貴重な機会になっている。このとき用いる集積表では、自己評価を反映したグラフと学習者のGPAから算出したグラフとが重なっており、時にはその形が大きく異なっている。その形の違いから、学習者の持っている実感や問題意識に触れる対話を行っていく。

学習者の入力したプロファイルシートについては、各指導教員がすべてのデータを閲覧し、総合的な視点から所見を入力し、その所見を元に1人ずつ面談を実施している。データの中には体験活動の時間数や学習者のふりかえりなども含まれるため、各学習者が苦手意識を持っている分野や、体験活動でどのような成果と課題があったか、などについて、情報をもとに対話を行うことができる。

4. 教員の自己内対話・教員と教員の対話

教員が自分自身の講義等をふりかえる自己内対話と各領域・専攻・コースのカリキュラムを検討する対話もプロファイルシートは媒介している。プロファイルシートワークブックは1年ごとに改訂の機会があり、各領域・専攻・コースで検討会が開かれる。そこで記載した達成目標は、各講義のシラバスに反映される。このことによって、教員は自分自身が担当している講義等について、他の講義との関係も見ながら、十分な学びを起こすことができているかを考えることになる。

この仕組みによって、専攻やコースが開講している講義のバランスや、力点を入れたい箇所について議論をすることができる。達成目標の改編に合わせて新たな講義を開講したり、既存の講義のリニューアルを行ったりする。

以上、プロファイルシートが媒介する5つの対話について概観してきた。

油布 [2011] が指摘していたのは、プロファイルシートのあり方の問題だけではなく、その背景にある教育観の問題であった。それは、プロファイルシートを用いた評価を行っていく上で、学習者にどのような学びのイメージが生まれるか、ということに関わっている。

もし、プロフィールシートが学習者にとって、「達成目標から考えて自分の不足しているところ」を考えるためのメディアとして機能しているのであれば、プロフィールシートは「あるべき教師の形、あるべき成長の形」に近づくための、ただのチェックリストということになる。

しかし、実際にはそうではない。プロフィールシートによる評価は、むしろ「あるべき教師の形、あるべき成長の形」を問い返し、思考する過程になるように運営を行っている。対話の過程は、問い返し、思考することを支援するための過程なのである。

以上のように、プロフィールシートはただ作成するだけで終わるものではなく、作成に伴って多様な対話が生起する点にその機能と役割をみることができる。

Ⅲ 結語

教育学部において教師になることをめざす学習者は、一様に成長するわけではなく、それぞれの課題や問題意識を持ちながら大学生活を送っている。プロフィールシートがめざすのは、「あるべき姿」を示すことによって学習者を抑圧することではなく、それぞれの課題や問題意識に向き合いながら、自分の考えていることやこれからのことについて言葉にしていけることを支援することである。

【参考文献】

- 1) 杉山憲司, 手塚洋一, 中挾知延子 [2012] 「シラバスとリフレクション・ペーパーのテキストマイニングによる内容分析」(『東洋大学社会学部紀要』49)
- 2) 谷塚光典, 安達仁美, 伏木久始, 東原義訓 [2011] 「教員養成初期段階の学生の「目指す教師像」のテキストマイニング分析の試み」(『日本教育工学会研究報告集』2011, 日本教育工学会)
- 3) 松下佳代【編】(2010)『<新しい能力>は教育を変えるか』ミネルヴァ書房
- 4) 油布佐和子 (2011) 「教職に何が起こっているか?」(『<教育>を社会学する』学文社)